

【その他】

Z世代の学生の特徴をふまえた教育方法の検討 ～地域・在宅看護学演習でのロールプレイの実際とその学習効果～

須田彩佳*

【要 旨】

情報化や少子高齢化などの社会変化の中で育ったZ世代の学生は、対人関係の希薄化、想像する力の弱さなどの特徴があるとされている。そこで、対象の暮らしと健康を支えるアプローチ方法の習得を目指しておこなった地域・在宅看護学におけるロールプレイによる演習を振り返り、Z世代の学生の特徴をふまえた教育方法について検討した。ロールプレイの演習をとおり、学生たちは対象者との援助的関係の構築方法を理解し、また対象者の健康状態や生活状況を具体的にイメージする重要性を学んでいた。Z世代の学生にとって、対象者と対面しコミュニケーションを取る体験を重ねることは、学生が非言語的情報を感じ取る能力の習得、また対象者の健康状態・生活状況を想像することにつながると考える。地域・在宅看護学の分野において、学生が「対面でのコミュニケーション能力」と「対象者の状態や状況を想像する力」を習得できるよう授業・演習方法や教材を工夫し、効果的な教育方法を検討していく必要がある。

【キーワード】 地域・在宅看護学, 演習, ロールプレイ, Z世代, 教育方法

【利益相反の有無】 開示すべき利益相反はない

I. はじめに

現代の大学生は「Z世代(Generation Z)」と呼ばれる。Z世代は、10代の多感な時期にはスマートフォンが身近にあり、SNSを駆使したコミュニケーションが当たり前になっている点から、「デジタルネイティブ」、「SNSネイティブ」とも呼ばれる(竹内, 2022,p.27)。Z世代はスマートフォンでインターネットとつながり、情報収集・情報発信する能力が高い特徴がある。また、多様性が重視されるようになり、Z世代は多様な個性を尊重し自己の世界観や価値観を重要視する傾向がみられる(髭白,2023)。一方で、Z世代が相対的にしなくなった、あるいはできなくなったことを長谷川(2019)は、対面コミュニケーション、読書、長文の読み書き、公での意見表出、ヴァーチャルでない五感を通した現実感覚などをリストアップしている。阿部(2018,p.6-8)は、現代社会で育った看護学生の特徴として、生活体験の乏しさ、対人関係の希薄化、文字情報から具体的な

状態や状況を想像する力の弱さなどをあげている。さらに、内藤(2024)は、Z世代の学生は初対面の人や年代の異なる人との対面でのコミュニケーションの機会が少なく、沢口(2024)は対人関係に不安を感じ、人との信頼関係の築き方を考える機会が減少していると指摘している。疋田(2012,p.46)は、医療・介護の職場で最も重視されるのは対面によるコミュニケーションであると述べている。このように、情報化、少子高齢化などの急激な社会変化の中で育ったZ世代の学生の特徴をふまえ、看護基礎教育において効果的なコミュニケーション能力や対象者の生活を想像する力を学習する教育方法を検討していくことが必要となる。

地域・在宅看護の対象は、さまざまな年代や健康レベル、価値観をもつ地域で暮らす生活者である。また地域・在宅看護の特徴として、看護者が生活の場へ赴き対象や家族の健康課題に対して看護を提供することがあげられる。看護者は対象や家族と対面し、限られた時間の中で信頼関係を築き、自然な会

* 日本赤十字北海道看護大学

話の流れから家庭の歴史、思いや健康状態の変化を把握し、実際の生活に合わせた支援をおこなう。これらのことから、学生は「対面での効果的なコミュニケーション能力」と「対象者の生活や健康課題をイメージする力」を習得する必要がある。2020年の指定規則改正で看護基礎教育課程における地域・在宅看護論の学びが重要視され、生活の場での療養を想定した学習がますます必要とされている(小池, 前田, 2022)。そのため、地域・在宅看護学において、学生に可能な限りリアルな学習機会を提供し、効果的なコミュニケーション能力と対象者の生活をイメージする力を養う教育方法の検討が必要である。

そこで本稿では、対象の暮らしと健康を支えるアプローチ方法の習得を目指しておこなった地域・在宅看護学におけるロールプレイによる演習を振り返り、Z世代の学生の特徴をふまえた教育方法について検討する。

Ⅱ. 地域・在宅看護学における地域・在宅看護学演習の位置づけと科目の概要

1. 地域・在宅看護学演習の位置づけ (表1)

地域・在宅看護学領域の授業科目は、2年次の「在宅看護概論」(1単位15時間)、「地域看護学概論」(1単位15時間)、「地域包括ケア論」(1単位15時間)、「地域・在宅看護学方法論」(2単位30時間)、3年次の「地域・在宅看護学演習」(1単位30時間)、3年～4年次の「地域・在宅看護学実習」(2単位90時間)で構成されている。2年次の授業をとおり、学生は地域での暮らしを支える看護活動とケアシステムについて学習する。3年次の地域・在宅看護学演習(以下、本科目という)で、暮らしと健康を支える知識・技

術・態度を習得し、それらを3～4年次の臨地実習における実践への統合につなげている。

2. 科目の概要

本科目の目的は、「地域で療養生活を送る人とその家族に対して、暮らしの場でおこなわれるフィジカルアセスメント、治療およびケアの技法について学び、対象の暮らしと健康を支えるアプローチ方法についてグループで取り組み、学びを共有する」としている。授業形態は講義及び演習であり、全15回で構成している。第1～9回および第12～15回を、暮らしの場でおこなわれる看護技術や社会資源に関する講義・演習とし、第10・11回に既習技術を統合しロールプレイを実施している。

本科目におけるロールプレイの展開のねらいは2つある。1つ目のねらいはコミュニケーション能力の習得である。ロールプレイをとおり訪問看護の一連を把握するとともに、訪問時のマナーを含めた援助的関係の構築方法を理解できることを目指した。2つ目のねらいは対象者の状態や状況を想像する力の習得である。暮らしの場でおこなう日常生活援助技術の方法や治療とその管理の実践をとおり、対象者の状態や反応に応じた対応ができることを目指した。

Ⅲ. ロールプレイの実際

1. ロールプレイの実施までの流れ

授業初回到科目全体の概要を説明した。講義はロールプレイの展開において必要な知識・技術・態度を習得するため第1～6回に実技演習を組み入れておこなった。地域・在宅看護過程の展開について

表1. 地域・在宅看護学における本科目の位置づけ

科目名	在宅看護概論	地域看護学概論	地域包括ケア論	地域・在宅看護学方法論	地域・在宅看護学演習	地域・在宅看護学実習
学年	2年				3年	3～4年
開講時期	後期				前期	通年
単位数	1単位	1単位	1単位	2単位	1単位	2単位
時間数	15時間	15時間	15時間	30時間	30時間	90時間
授業形態	講義	講義	講義	講義	演習	実習
授業概要	暮らしと健康を支えるために必要な基礎的、専門的知識を学ぶ。	人々の健康やQOL向上を目指した看護活動を学ぶ。	地域包括ケアシステムの概念と意義を理解し、ケアマネジメントを学ぶ。	知識と技術を習得し看護過程の展開方法を学ぶ。	臨床判断能力を活かした技法を学ぶ。	自己の知識と実践を統合する。

は、2年次後期科目の地域・在宅看護学方法論でも展開していたが、看護過程の展開のレベルアップを目指し、記録の進め方や書き方のポイントについてクラス全体に再度講義をおこなった。

ロールプレイの展開事例は、模擬カルテを用いて紹介した。ロールプレイの展開に向けた準備として、まず学生は模擬カルテから情報収集と情報の分析、全体像の把握、看護計画の立案に取り組んだ。学生が取り組んだ事前課題に対し教員からフィードバックおこない、学生はこのフィードバックを反映させて事前課題に追加や修正をし、その内容を持ち寄ってグループワークに参加した。

グループワークの初回は、ミニゲームを交えた自己紹介から始め、メンバー間の交流を深め関係性構築を図った。ロールプレイに向けた目標をグループで掲げ、目標達成に向けてグループメンバーが協力して取り組むことへの意識づけをおこなった。また、学生個々が取り組んだ事前課題をメンバー間で共有し、メンバー全員で事例に対する対象理解を深め合う時間を設けた。その後、グループでロールプレイ

の展開に向けた看護計画の立案、ロールプレイシナリオを作成した。グループで立案した看護計画とともに、学生はロールプレイの実施前週に実習室で練習し、物品やシナリオの確認、シナリオの修正に取り組んでいた。ロールプレイの実施までの流れとプログラム内容を表2に示す。

2. 事例作成について

事例作成にあたり、「認知症」や「在宅看取り」、「排泄ケア」等の本学における臨地実習において学生が多く出会う疾患やケア内容等を取り入れた。また、学生が計画立案しロールプレイによる演習で実践できるように、「全身状態の観察」、「ストマケア」、「陰部洗浄」、「リハビリテーション」、「介護負担感の確認」等の要素も含めた。

学生の特徴として、核家族化等の背景により、高齢者との同居体験や他者を世話する経験が少なく、高齢者や疾患および障害をもつ人の暮らしをイメージすることが困難になってきているとの指摘がある(福島,小山,村田2021)。このことから、学生が超高

表 2. ロールプレイの実施までの流れとプログラム内容

回	授業形態	学習内容	方法
1	講義	授業概要の説明、科目全体の進め方の説明 地域で療養生活を送る人とその家族へ訪問する際の心がまえ、面接技術 地域・在宅看護過程の展開方法 事例紹介、模擬カルテの説明、記録の進め方の説明	オリエンテーション
2	講義	暮らしの場でおこなわれるフィジカルアセスメント技術（呼吸・循環）	
	演習	2～4人に分かれ呼吸音、心音聴取の技術確認	実技演習
3・4	講義	暮らしの場でおこなわれる日常生活援助技術 （環境整備、活動、生活リハビリテーション、食事と栄養、排泄、清潔と更衣）	
	演習	日常生活援助技術演習（オムツ交換） グループメンバーと自己紹介、事前ワークの進捗状況の共有	実技演習 グループワーク
5・6	講義	地域で療養生活を送る人の治療とその管理 （栄養状態改善、在宅酸素療法、人工呼吸療法、疼痛緩和、褥瘡処置、膀胱留置カテーテル、ストマ管理）	
	演習	日常生活援助技術演習（食事や保清に関する自助具、移動に関する福祉用具） 治療と管理についての演習（膀胱留置カテーテル管理、ストマ管理） グループメンバーとスケジュール作成、ロールプレイの展開（発表）の役割分担の決定	実技演習 グループワーク
7	講義	ロールプレイの展開（発表）の進め方に関する説明	オリエンテーション
	演習	グループメンバーと関連図の作成、ロールプレイの展開（発表）のシナリオを含めた看護計画の立案（1）	グループワーク
8・9	講義	事例課題に関する個人および全体へのフィードバック	
	演習	グループメンバーと関連図の作成、ロールプレイの展開（発表）のシナリオを含めた看護計画の立案（2） ロールプレイの展開（発表）の準備として実習室での練習、物品の確認	グループワーク 実技演習

齢社会と介護問題についても考えることができ、かつ対象者との意図的なコミュニケーション技術を習得できる事例になるよう検討を重ねた。また、学生が看護過程の展開をイメージできるよう、模擬カルテには基本情報、訪問看護指示書、訪問看護計画書および報告書、居宅サービス計画書、週間サービス表を収めた。学生に提示した事例を表3に示す。

3. ロールプレイの展開方法

本科目の履修者112名をAクラス(55名)、Bクラス(57名)に分け、さらに各クラスを12グループに分け、1グループ4～5名とした。メンバー構成は、本科目後に控えている領域別看護学実習のグループメンバーとした。

ロールプレイの発表で演じる訪問看護師役、看護学生役、療養者役、家族役はグループ内の各メンバーが担った。ロールプレイの発表にあたり、学生には役柄を理解して演じること、実際に訪問するつもりで実践すること、グループで作成したシナリオは見ながら演じて良いことを説明した。ロールプレイの発表日は、実習室内の混雑緩和とスムーズな進行、効果的なディスカッションになるよう考慮し、A、Bクラスを別日設定とした。各グループがロールプレイを発表するにあたり、訪問場面を4つに区切り、そのうちの一場面を発表できるような課題を提示した。課題として提示した具体的な4つの場面設定を表4に示す。

①場面設定1：訪問を開始し、全身状態の観察、

本日の看護援助について説明し同意を得る

②場面設定2：場面設定1に続けて、ストマケアを家族への指導も含めて実施する

③場面設定3：場面設定2に続き、陰部洗浄とオムツ交換について家族への指導も含めて実施する

④場面設定4：場面設定3に続き、リハビリテーションを家族への指導も含めて実施し、次回訪問の約束をして退室する

ロールプレイの発表は実習室でおこなった。実習室には療養環境をイメージして用意した場所を3ブース設けた。各ブース一斉に発表を開始し、ロールプレイを20分以内で発表し、発表後に発表グループと観察グループとのディスカッションを10分、教員からのフィードバック3分、片付けと次の発表準備2分の計35分を1クールとした。

発表後はグループに分かれ、ロールプレイの発表の振り返りや他のグループとのディスカッション内容の共有を20分でおこなった。それぞれの役柄を演じて得た感想や気づきの意見交換、立案した看護計画に対する評価、計画修正についての方向性の確認、さらに他のグループの発表内容から学んだ訪問看護場面の一連について共有した。

ロールプレイの発表をとおした学びや他のグループから得た意見等をふまえ、より具体的で個別性の高い看護計画立案になるよう修正等をおこない、グループでの最終成果物とした。

表 3. 学生に提示したロールプレイの演習事例と課題

<p>長崎はるみさん、90歳代の女性。70歳代の長女夫婦と暮らしています。親子関係は良好です。</p> <p>長崎さんは70歳のときに直腸がんで手術しストマ造設し、その後も自己管理できていました。しかし80歳のときにアルツハイマー型認知症の診断を受け、この頃から体調確認やストマ交換のため訪問看護を利用し始め、現在は週2回利用しています。</p> <p>89歳のときに転倒し腰椎圧迫骨折にて入院し、現在は主にベッド上での生活をしています。延命処置はおこなわず、自宅で見守る方針で家族・主治医間で合意しています。現在は要介護5、日常生活自立度については寝たきり度C2、認知症の状況Ⅱaです。</p> <p>現在は両股関節・膝関節・肘関節に拘縮があり、尿失禁のため尿取りパットを使用し生活全般に介護を必要とします。</p> <p>現在利用する社会資源は、訪問看護、訪問診療、訪問入浴介護、福祉用具貸与(褥瘡予防用具・特殊寝台・介助バー)です。</p> <p>前回の訪問から3日後、本日も60分未満の訪問で、全身状態の観察、家族の介護状況の確認、ストマケア、保清ケア、リハビリテーションを予定しています。今回の訪問では、看護学生が同行し訪問看護師とともに対象者らとコミュニケーションを図り、援助をおこなう内容として、各グループで立案した看護計画とシナリオにもとづきロールプレイの発表をします。</p>

Ⅳ. ロールプレイ演習を振り返って

地域・在宅看護学演習において、対象の暮らしと健康を支えるアプローチ方法の習得を目指してロールプレイの演習をおこなった。学生は、ロールプレイの発表後の振り返りや、他のグループとのディスカッション内容の共有等から学びを得ていた。学生の学びに基づき、ロールプレイの演習の振り返りより、Z世代の学生の特徴をふまえた教育方法について、コミュニケーション能力の習得と対象者の状態や状況を想像する力の習得の2側面から検討する。

1. コミュニケーション能力の習得

学生は、ロールプレイの発表をとおして、対象者の生活の場におけるコミュニケーションや信頼関係の築き方を学んでいた。学生からは、「ロールプレイをとおして『限られた時間』を意識した相手に伝わる質問や会話の練習ができた」、「声かけの方法や訪問マナーについて他のグループの発表を見学し『自分だったらどうするだろうか』と考える時間になった」などの反応があった。小池,前田(2022)は、ロールプレイで学生が療養者・家族・看護師のそれぞれの役割を体験することで、在宅看護の特徴の理解や訪問場面のイメージ化につながるとしてい

る。また西崎,菊地,蓮井(2008)はロールプレイによって、言葉遣いやマナーをはじめ家族への気遣いなど、訪問看護師として求められる行動を考える機会になると述べている。オンラインコミュニケーションに慣れているZ世代の学生にとって、対面で相手の表情や心情をつかむことは容易なことではないと推察される。学生が相手と対面し相手に関心を向け、表情やしぐさ、声の調子などの微妙な非言語的情報を感じ取れる体験を重ねていくことは、コミュニケーション能力の向上につながると考える。そのため、対象者の生活の場で看護を提供するうえで配慮する内容や立ち振る舞いについても学び合う機会となる効果的なロールプレイの実践が今後も必要であると考える。

ロールプレイの発表方法について、学生から「対象者役を他のグループの学生に担ってもらい、自分たちのコミュニケーション能力やその場での対応力を客観的に評価するのはどうか」との意見もあった。ロールプレイの演者の設定について、療養者や家族といった対象者側の役を他のグループや教員、人形にすることで、教育効果があったことが報告されている(宇多,成瀬,2011;及川,十枝,2019)。これらの先行研究にあるように、よりリアルな設定で効果的な演習になるよう配役を含めた演習内容を検討する必

表 4. ロールプレイの演習における具体的な場面設定

【場面設定 1】

訪問看護師と看護学生は約束した訪問日時に自宅に到着します。出迎えてくれた長女夫婦に自己紹介をします。訪問看護師と看護学生は手洗いを済ませ、長崎さんがいる和室に案内してもらいます。長崎さんに声をかけると返事があり、長崎さんに必要な全身状態を観察、家族の介護状況等を確認します。本日の看護内容(ストマ交換、陰部洗浄、関節可動域訓練等)について伝え、了承を得ます。

【場面設定 2】

場面 1 に続き、ストマ交換をおこないます。ストマ周囲の皮膚トラブルはなく便漏れもありません。軟便、茶褐色の排便が見られています。訪問看護師は長崎さんと長女夫婦に現在の状況を分かりやすく説明しながら援助をおこないます。長崎さんのストマ交換時には長女夫婦は訪問看護師からの説明を熱心に聞いています。

【場面設定 3】

場面 2 に続き、陰部洗浄をおこないます。尿取りパットには排尿がみられていました。陰部に発赤や痛みは見られていません。長崎さんは体動時に痛い様子で「いやいや」と言います。長女夫婦は訪問看護師からの説明を熱心に聞いています。長女が毎日陰部洗浄をしていることに対して、訪問看護師はねぎらいの言葉をかけます。

【場面設定 4】

場面 3 に続き、ベッド上でのリハビリテーションをおこないます。長崎さんは体動時に痛い様子で「いやいや」と言いますが、訪問看護師は長崎さんに痛みを確認しながら関節可動域訓練を一通り実施します。長女や夫は普段の様子について訪問看護師に話します。今後のケアの方向性の確認、介護状況の把握、緊急時の連絡方法等について相談し、次回は〇曜日に訪問することを伝え、訪問を終了し退室します。

要がある。

また、グループでの学習をととしてグループメンバーとコミュニケーションを十分に取ることの重要性に気づく学生もいた。学生からは「グループでお互いに意見を出したことで深く考えるきっかけになった」、「お互いを支え合えた」などの反応があった。西崎,菊地,蓮井(2008)は、地域・在宅看護におけるグループ学習の効果について、他者と協働して成し遂げるために他者に自分の考えを説明したりチーム内で協力し合うこと、価値観の多様性に気がつき価値観を受け入れる体験は、専門性の異なる他職種と連携や協働が求められる地域・在宅看護に必要な態度の育成につながると述べている。また、山田(2023)はクラスやメンバーが心理的に安全だという感覚が個々のポテンシャルと組織のパフォーマンスを最大化させると述べている。ロールプレイの演習において、学生がメンバーに遠慮なく相談や意見を述べるができるグループづくりは、安心して課題に取り組むことや、目標遂行につながったと考えられる。学生が安心して学びを深められる環境を整えることが重要であることから、今後もメンバーとの良好な関係性構築に向けた工夫をおこなってきたい。

2. 対象者の状態や状況を想像する力の習得

学生は、ロールプレイの展開をととして、自宅に訪問して看護を提供することや、対象者の健康状態や生活状況、価値観を含めた対象理解が必要であることに気づきや学びを得ていた。学生からは、「ロールプレイをおこなって訪問する際のイメージがついた」、「自宅内の様子や家族の介護力を把握する必要性に気がついた」、「退院後の生活をイメージする視点を持つことができた」などの反応があった。Z世代の学生の特徴として、高齢者や疾患および障害をもつ人の暮らしをイメージすることが困難になってきているとの指摘がある(福嶋,小山,村田2021)。また阿部(2018,p.6-8)は、Z世代の特徴を生活体験の乏しさ、文字情報から具体的な状態や状況を想像する力の弱さについて指摘している。さらに小池,前田(2022)は、学生にとってリアリティのある学習環境の整備、情報通信技術 (ICT) の活用など演習方法の工夫が必要であると述べている。したがってZ世代の学生は、文字情報から具体的な状態や状況をイメージすることが苦手であるため、イメージ図や動画の提示など、対象者の理解が促されるような授業

内容や提示資料の工夫が必要である。また、ロールプレイの発表を学生が動画撮影し、お互いに客観的な評価ができるようICTを活用した演習をおこなえるよう工夫していく必要がある。

V. まとめ

Z世代の学生にとって、対象者と対面し非言語的情報を感じ取る体験や学生同士が学び合う機会は、学生のコミュニケーション能力の向上につながると考えられた。また、学生が安心して学びを深められる環境を整えることは、メンバー間におけるコミュニケーションの促進と、グループによる協働に効果的であると推察された。さらに、生活の場を再現し、実際に想定したロールプレイの演習は、学生の観察力や想像力が向上し退院後の生活をイメージできることにつながると考えられた。

今後の課題は、客観的に評価できる方法と、学生が対象の状態や状況をイメージできるよう、図や動画を活用する等の学習環境やICT活用について工夫と検討を重ねる必要がある。

文献

- 阿部幸恵(2018). 看護基礎教育におけるシミュレーション教育の導入. 日本看護協会出版会,6-8.
- 福嶋洋子,小山真理子,村田由香(2021). 慢性疾患患者の退院指導で臨地実習指導者が捉えた看護学生の困難と困難に対する指導者の工夫. 日本看護研究学会雑誌,44(2),275-284.
- 髭白晃宜(2023). SNSコンテンツ利用にみるZ世代の消費行動のありかた. 産業総合研究,32,1-13.
- 疋田幸子(2012). 看護・介護の快適コミュニケーション55のルール. 日本看護協会出版会,46-47.
- 長谷川寿一(2019). 人間行動進化学から見た今どきの若者. 児童青年精神医学との近接領域, 60(3),301-305.
- 小池美香,前田和子(2022). 看護基礎教育課程における在宅看護論の学内演習に関する文献検討. 茨城キリスト教大学看護学部紀要,14(1),43-52.
- 内藤知佐子(2024). 若手とのコミュニケーションの際に心がけるべきポイント. 看護展望,2024-2,23-26.
- 西崎末和,菊地珠緒,蓮井貴子(2008). 在宅看護論演

- 習における授業方法とその学習成果に関する文献研究. 川崎市立看護短期大学紀要,13(1),11-16.
- 及川理恵,十枝初重(2019). パフォーマンス課題を取り入れた演習が在宅看護論実習に及ぼす効果. 第49回(平成30年度)日本看護学会論文集 在宅看護, 71-74.
- 沢口夏季(2024). まず聴くこと!患者の心を開き信頼関係を築く方法をどう教える?. 看護人材育成,21(1),78-83.
- 竹内義晴(2022). Z世代・さとり世代の上司になったら読む本. 翔泳社.
- 宇多みどり,成瀬和子(2011). 在宅ケア論演習による学習効果—経時的状況設定における訪問看護疑似体験から—. 神戸市看護大学紀要,15,35-45.
- 山田剛史(2023). 大学教育における心理的安全性の重要性と学生エンゲージメントに及ぼす影響. 関西大学高等教育研究,14,7-18.